

説教題：「心に記(しる)す」

聖書箇所：エレミヤ書31章31-34節（1237頁）、ローマの信徒への手紙2章9-16節（275頁）

説教者：秀島行雄牧師 招詞：讚美歌93-1-52 交読詩編：詩編119編41-48節（133頁）

讚美歌：83/566（むくいを望まで）/157（いぎ語れ、主の民よ）/579（主を仰ぎ見れば）/27

「今週の聖句」〔…来るべき日に…わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。

わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。〕（エレミヤ書31：33）

「牧師室の窓」 「終戦後八十年を経過して尊き平和の襷(たすき)を繋ごう」

「スラブでの戦火終息如何にやと国際政治の知恵を武器にて」

(1)皆様おはようございます。本日は8月31日を迎えました。今年は先の大戦、アジア・太平洋戦争の終戦から80年に当たります。また、1926年の昭和元年から100年になります。この国の100年間は激動の時代でありました。100年前の日本国民は貧しく、食べ物は十分とは言えませんでした。都市に住む中産階層や上流階層の少数の人々を除くと、大多数を占めていた農村・漁村の人々は貧しさと隣り合わせでありました。その様な国が食料を求め、石油やゴムを求め、外国と戦争を始めて、完敗してしまいました。まことに無謀、計算をすることも、深く考えることも、放棄してしまった時代でありました。人間は目の前の利益に過敏に反応し、先を見通す思考力を失ってしまいます。

私は学生時代に会計学を学び、職業上・仕事として活用してきました。貸借対照表や損益計算書に書かれている数字は、単なる数字の羅列ではなく、過去の実態を語る数字であり、未来を予測する道しるべです。日本ではこの夏場前からお米の値段が大幅に上がり、この夏の雨不足、場所によっては、豪雨による水害とで、お米の生育が危ぶまれています。日本の食糧需給率はエネルギー換算で4割弱と試算されており、核兵器を含む武力や関税の強権を振りかざしての国際政治の中であって、日本が急速に食料難へと突き落とされてしまう危険が予測されます。不確実性が増大しています。

その様な将来に備えて、或いは、私たち個々人の人生の将来に対する対処心構えとして、旧約聖書のエレミヤ書を読むことは大切です。併せて、新約聖書とどの様な関連があるかを学ぶことは、私たちに生きる勇気を与えてくれることと思います。今日の主題・テーマは「心に記(しる)す」です。

(2)前回8月17日の礼拝説教では旧約聖書エレミヤ書の時代背景について申し上げました。強大なダビデ王国は2代目のソロモン王の時代に経済的に栄華を極めました。3代目に内紛が起きて、国は南北に分裂してしまいました。まさに、「平家物語」の栄枯盛衰、盛者必衰(じょうしゃひっすい)・驕れる人も久しからずです。

北イスラエル王国は約2百年後に外国からの攻撃で滅亡しました。南ユダ王国は外国からの無理難題や攻撃を受けつつも存続していました。その様な状況の中でエレミヤは神の言葉に促されて預言者として活動を始めました。紀元前630年頃のことです。併し、約40年後に南ユダ王国は滅亡し、多くの人々が捕虜となり約1千km離れた外国にお引き連れられました。バビロン捕囚です。出エジプト記による荒れ野での流浪の生活が40年、その荒れ野の40年を超える約50年がバビロン捕囚となったわけです。…この約50年と言うのは第1次バビロン捕囚から数えてであり、第2次捕囚から数えては約40年間です。50年間のバビロン捕囚の中で、生きる希望として、詩編が作られ、バビロン捕囚後に再建された神殿での拝礼で詩編が読まれていきました。その代表的な歌が「詩編137編」です。〔(詩編137:1)バビロンの流れのほとりに座り/シオンを思って、わたしたちは泣いた。(137:2)豎琴は、ほとりの柳の木々に掛けた。(137:3)わたしたちを捕囚にした民が/

歌をうたえと言うから／わたしたちを嘲る民が、楽しもうとして／「歌って聞かせよ、シオンの歌を」と言うから。(137:4) どうして歌うことができようか／主のための歌を、異教の地で。(137:5) エルサレムよ／もしも、わたしがあなたを忘れるなら／わたしの右手はなえるがよい。(以下省略)

(3) 南ユダ王国が滅亡する40年も前に主の言葉が若者エレミヤに語り掛けられました。神の言葉を人々に伝えなさい、預言者として行動しなさい、との呼び掛けにエレミヤは、自分自身がその任務に向いていないと思い、預言者となることに消極的でありましたが、神には人間の理解を遙かに超える判断基準があったのです。エレミヤは主の言葉を伝え、悔い改めの言葉を伝えますが、人々は耳を傾けることなく、偶像礼拝に身を委ね、貧しい者を虐げ、正義から遠く離れて行きました。

…これは2千6百年前のことであると供に、私たちのこの現代社会の状況でもあり、聖書は過去の遺物ではありません。

…出エジプトの荒れ野の40年で、神はモーセを介して、イスラエルの人々に、10の戒め・掟である「十戒」与えられました。その「十戒」を人々が日々の生活の基盤とすることの大切さ、不可欠さを、主なる神はエレミヤの口を通して繰り返し、繰り返して語り掛けてきました。併し、人々は理解することなく数十年が過ぎ去りました。

主なる神は考えたのです。民に与えた「十戒」と言う契約が守られることがないのは何故なのか。どうしたらよいのか。神が苦悩して、考える様子、その過程(プロセス)がエレミヤ書31章の1～30節までに書き記されています。皆様もあとでお読みになって下さい。その幾つかをお示ししますのでお聞き下さい。3節〔(エレミヤ書31:3) 遠くから、主はわたしに現れた。わたしは、とこしえの愛をもってあなたを愛し／変わることなく慈しみを注ぐ。〈これは愛情の豊かさです〉

5節 (31:5) 再び、あなたは／サマリアの山々にぶどうの木を植える。植えた人が、植えたその実の初物を味わう。〈これは労働に対する喜び、或いは、経済的な収入の裏付けです〉

10節には諸国の間での平和が、12節には食料や経済の安定が、13節や16節には嘆き・苦しみからの解放が、そして、21節には「道しるべ」が書かれています。

これらは、現代の言葉で言い表すならば、「問題解決方法」と言う意味での「出口／Exit(エグジット)対策」です。例示で言いますと、「皆さん、問題解決方法を考えてみて下さい。」と言う時に、「Exit(エグジット)はどうなりますか。」と言い換えることができます。ご参考に申し上げました。この31章の1～30節までに書かれている主なる神の思案・考え方の道筋を、是非とも、ご自分でお読みになって、実体験をして頂きたいのです。皆様の生活の中での問題解決に必ずや役に立つことと思います。

(4) 扱て、今日の聖書箇所のエレミヤ書31章31～34節の場面です。この箇所はエレミヤ書の中で最も重要な箇所であります。主なる神がイスラエルの民に「新しい契約」を与えることになったのです。「新しい契約」とは「十戒」を「旧い契約」と見立てての新しい契約です。31節32節を読みますのでお聞き下さい。〔(31:31)見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。(31:32)この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った、と主は言われる。〕

「旧い契約」である「十戒」の何が問題であったのでしょうか。

1つには、神がイスラエルの民を守る、そのことに対して、人々は主なる神を神として、「10の戒め、規則、ルールを守る」ことにあります。これを法律の用語では、双方が夫々の為すべきことを行なうと言う意味で「双務契約」と言います。併し、人間には、ある人々には、与えられたルール

を守ることが出来ないのです。律法を学んだ律法学者もパリサイ人も守ることが出来ませんでした。現代社会でも、法律を学んだ人が法律を守ることが出来ない現実があります。私は職業上多くの法律の専門家とお付き合いをしました。人間味豊かな方々が多くおられました。併し、そうではない方がおられたことも事実です。人は見掛けではなく、誠実さと約束を守る人であるか否かで判断しなければならないことを私は学びました。…誠実さとは、物事を自分勝手に考えない、相手の立場を理解する行動であり、日常の生活に現れます。

では、「古い契約」である「十戒」の何が問題であったのでしょうか。

2つには、旧約聖書のレビ記19章18節に書かれている〔(レビ記19:18)…自分自身を愛するように隣人を愛しなさい…〕と言う掟です。皆様もご存じの様に、新約聖書のマタイ伝(22章)・マルコ伝(12章)・ルカ伝(10章)に「最も重要な掟」として書かれています。残念ながら、人間はこの重要な掟を見て見ぬふりをしてしまうのです。勿論、自分の出来る範囲で行なうことの判断力が必要です。日本の基督教の団体は、この重要な掟に対しては実に無力であると言わざるを得ません。ガザの餓死寸前の状況やスラブでの戦争殺戮(さつりく)に対しては基督教の看板を放棄していると神の目に映ってはいないでしょうか。世間は教会を厳しく見ているのです。

(5)33節を見てみましょう。〔(31:33)しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。〕エレミヤ書に書かれている「新しい契約」とはここにあるのです。

シナイ契約での「十戒」が「石の板」に書かれた／刻まれたことに対して、「新しい契約」は「わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す」と書かれているのです。

この言葉は旧約聖書の中ではエゼキエル書36章26節(1356頁)に「わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。わたしはお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える」と書かれているのみで、埋没してしまいましたが、底流に流れ、伝えられて行きます。

新約聖書はエレミヤ書のこの「新しい契約」に注目しています。使徒言行録の聖霊降臨では聖霊が「一人一人の上にとどまった」と書かれています。今日の聖書箇所の新約聖書ローマの信徒への手紙2章11節には〔(2:11)神は人を分け隔てなさいません。〕と書かれており、15節には〔(1:15)こういう人々は、律法の要求する事柄がその心に記されていることを示しています。彼らの良心もこれを証ししており…〕と明記されています。

では、きょうの聖書に書かれている「心に記(しる)す」とは何でありましょうか。

そのことは、180度裏返しにして、「心に記(しる)された私たちは何をすべきか」という課題が与えられることとなります。

と言うことは、洗礼を受けてクリスチャンとされた私たちはこの社会で、市民生活の中でどの様に生きるかを考える機会を与えられたことに他なりません。大切なことです。私たちは、地上の生活に市民権を持ちつつ、天の国に籍を置いているのです。一つの体にして、二つの人生を歩むことが与えられているのです。

雑学ですが、福澤諭吉は江戸時代に33歳まで生き、明治維新後もほぼ同じ年数を生きました。激動の時代の生き証人となり、一つの体で、二つの人生を生きる(一身にして二生を生きるが如し)との言葉を残しています。福澤諭吉は若い頃には基督教を非難しましたが、子供たちには宣教師を家庭教師にして、基督教を学ばせました。

元に戻りまして、「心に記(しる)された私たちは何をすべきか」神に祈りつつ、これからの日々を過ごし、人生の歳月を御言葉と共に歩んで参りましょう。

・・・お祈りします。

イエス・キリストの主なる神様。私たちは、平和聖日の8月を過ぎて参りました。80年前までは、長い年月が戦争のために費やされアジア・太平洋各地が戦場となり、現地の人々の、日本人の夥しい人命が失われました。日本の国内も戦場となり、戦災により、原子爆弾により、多くの命が絶たれました。その戦争終結から80年を経た今日、地球の各地で戦争が起きており、悲しい状況が続いています。神が創造されましたこの地球上に生きる一人一人に平安・平和と希望が与えられますように。食べ物が乏しい人々に、災害や戦争の只中にある一人一人に慰めがありますように、お守りください。私たちに知恵と勇気をお与え下さい。

教会に連なる一人ひとりに、地域で生活している、働いている一人ひとりに、主なる神の御恵みと平安がありますように。

イエス・キリストの御名によって祈ります。 アーメン